共に生きるために

2018年度 事業報告書

April 1, 2018 - March 31, 2019

学校法人 アジア学院

共に生きるために 2018年度 事業報告書

目次

農村指導者を育てる

07 バラエティに富んだ学びの機会は
アジア学院のカリキュラムの力

08 実践を重視した研究科生の学び

09 Participant Story
模範は職員

サポーターと共に

16 共に生きるためのヒントを発見する

18 使命を達成するための生きた財産

19 農場の豊かさを支援者と分かち合う

アジア学院の フードライフ

10 食と命、より深く理解するには

11 全キャンパスを巻き込む畜産

12 Key Concept
フードライフの意味とは

13 風土に適した作物づくり

Spotlights, Reports, Data

04 2018 Snapshots

15 Family Story
全ての人に平等に愛を注がれた
生涯に感謝して

18 最高のものを分かち合う

20 ケニアの大地を踏んで

23 Graduate Story
ある一人の卒業生の死に際して

24 財務報告

26 カリキュラム

26 研修でお世話になった方々

27 コミュニティメンバー

28 2018 年度卒業生

学校法人
アジア学院

共に農村の未来に投資しましょう！ 〉〉〉〉〉〉

アジア学院は草の根の農村コミュニティ指導者を養成しながら、共に生きるための学びを広げる学校です。
その大切な活動を支えるのは私たちと皆さんです。一緒にの世界の農村の未来に投資しませんか？

郵便振替
振込口座　郵便振替　00340-8-8758
口座名義　学校法人　アジア学院

銀行振込
足利銀行　西那須野支店
口座番号　112403　（普通預金）
口座名義　学校法人　アジア学院　理事長　星野正興

〉〉〉 その他のご寄付・ご支援方法：www.ari-edu.org/support/

共に生きるために
2018 年度　事業報告書
（2018 年 4 月 1 日～ 2019 年 3 月 31 日）

表紙イラスト　アイリス・バーバンク
印刷　株式会社 プリントパック

© 2019 年　学校法人アジア学院

www.ari-edu.org

冒頭挨拶

2018年度も神のお守りと多くの方々の祈りとご支援に支えられて、無事に充実した研修プログラムを遂行できたことを心より感謝申し上げます。

今年度は9月に、アジア学院のビジョンを描き、今日まで私たちを導いてくださっていた髙見敏弘先生が天国に召されました。髙見先生が残された言葉の中から、多くの方に読んでいただきたいと思ったものを選び、「乏しさを分かち合う」という小さな冊子を作りました。その作業の中で、先生のお考え、思い、情熱、悲しみ、願い、そして深い愛に改めて触れ、アジア学院のビジョンがこれまでも、そしてこれからも、人類共通の目的を示しているものであることがわかりました。それは、私たちが多くの違いを乗り越えて、神と、自然と、隣人と「共に生きる」ことを目指し、そのために分かち合い、互いに仕える心と姿勢とを身に着けて、共に平和のうちに生きることです。そしてそれは特に私たちが生きていくうえでなくてはならない「食べる」ために必要な活動（Foodlife）において具現化されていかねばならないということであります。ですから私たちは今日も、昨日と同じように、仲間と共に一日を始め、食べるための作業を共に行い、共に収穫物を感謝していただき、共に生きるために必要な学びを深め、よりよいコミュニティー作りのためにできることを共に追求します。そのことが続けられる恵みに感謝します。

今年は、卒業生のひとりひとりを個人としてだけではなく、団体に所属するスタッフとして認識することを新たにした年でもありました。これまでアジア学院は卒業生の所属する団体との関係構築に力を入れる余裕はありませんでした。しかし、2013年度の40周年事業における卒業生からの強い要望からその必要性に目覚め、卒業生影響度調査（2014～2015年）、卒業生アウトリーチ部門の設置（2017年）など、そのための必要な活動を広げ、また深めてきました。6月には卒業生の所属団体の幹部養成のための特別研修(組織強化研修(Organizational Capacity Building Training)を実施し、インドネシアのHKBP（バタック・キリスト教プロテスタント教会）から1名のスタッフを3カ月間受け入れました。今後はこのように、卒業生の所属団体をアジア学院のミッションを共に達成する「パートナー」と捉えなおし、建設的な関係構築を進めていきたいと考えています。

2018年度はまた、国内の高校生、大学生等に対する教育プログラムの拡充に力を入れました。年々増える教育機関からのアジア学院に於ける教育プログラム実施の要望に応え、アジア学院ならではの内容を展開できるように工夫を凝らし、若い世代とのアジア学院の理念の共有を図りました。教育プログラムの宿泊所である隣接する那須セミナーハウスでは過去最高の人数をお迎えすることができました。

秋には、アメリカ、テキサス州のテキサスキリスト教大学よりGlobal Innovatorという賞をいただき、2019年度より平和と和解のためのプログラムを協働で進めることとなりました。また2月にはアジア太平洋地域の相互理解と友好関係を推進するかめのり財団より第12回かめのり賞をいただきました。

最後に、アメリカ、カナダの教会、国内の助成団体、多くの個人のご支援により、女子寮の風呂場と台所を改修することができ、特に冬場の女子寮での生活の質が格段に上がったことを、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

星野 正興
理事長

荒川 朋子
校長

2018 Snapshots

国際理解と平和貢献が評価される

アジア学院の活動が国内外で評価され、2018年度2つの賞を頂きました。

公益財団法人かめのり財団第12回かめのり賞人材育成部門受賞

日本とアジア・オセアニアの若い世代を中心とした相互理解・相互交流の促進や次の世代の社会づくりに貢献できる人材育成を行っている個人、団体に与えられる、かめのり賞を受賞することができました。

テキサスキリスト教大学グローバル・イノベーター賞

アメリカ テキサス州のテキサスクリスチャン大学 (TCU) よりローバル・イノベーターという賞をいただき、2019年度より平和と和解のためのプログラムを協働で進めることとなりました。

TCU のグローバル・イノベーター・イニシアティブは人身売買、自然保護、ジェンダー格差是正、原住民の権利、難民の教育、資源の持続可能性、癒しと和解などの世界的に重要な課題に取り組む草分け的な個人と、TCU の教員、職員、学生が長期に亘ってパートナーシップを結ぶプログラムです。

髙見先生 語録集作成

9月6日に召天した髙見敏弘名誉学院長のお別れ会(12月13日)に合わせ、髙見先生の残された数多くの言葉から、特に印象深い言葉を選び、語録「乏しさを分かち合う」を作成しました。

この語録はアジア学院の源流ともいえる髙見先生の創設当初からの思いを偲び、その素朴な言葉を次の世代に継ぐのが目的です。

企画に当たり、アジア学院の働きの背後にある哲学と信念を若い世 代に伝えることを意識しました。編集、翻訳、校正、挿絵の全ての工程で多くのボランティアの方々の協力を得て完成を見ました。

原材料は 100% アジア学院産

2018年度は新商品である玄米せんべいを東京都足立区にある手焼き米菓製造所に依頼、販売しました。

原料はアジア学院の玄米と二年仕込み醤油のみ。同様に地元の食品加工会社と肉味噌を試作、販売しました。

さらに、被災地支援を行うNPO 栃木照る照る坊主の会の協力を得て、収穫感謝の日にアジア学院オリジナルラーメンを販売しました。

津波災害を記憶する

3月8日～9日岩手県陸前高田市の津波到達ラインに桜を植樹する「さくらライン３１１」というプロジェクトに職員と家族、計22名で参加しました。

宿泊を含む職員リトリートを行うのは15年以上ぶりで、職員、家族の親睦を深めるよい機会ともなりました。初日は陸前高田市の「奇跡の一本松」のモニュメントや被災地の見学、被災者による写真展、復興資料センターの見学をし、2日目に植樹を行いました。植樹にはアジア学院の他、約90名くらいのボランティアが全国各地から参加しました。

卒業生セミナー

アジア学院は９月 12 日〜 13 日に二人の経験豊富な卒業生を招き、アジア学院での学びを卒業後どのように地域の人々の為に用い、活動をしてきたかについて経験を分かち合ってもらいました。

一人はインドネシアのウェスリー・リンガ（1993 年卒業、1999 年研究科生）、農村開発活動研修センター（RDATC) の創立者であり、自分の村の村長としても活躍しています。もう一人はケニアのジェスカー・ブチェ（2013 年卒業）です。彼女は、夫でありアジア学院の卒業生でもあるイマヌエル・バヤと一緒にマガリニ子どもセンターと有機農場を立ち上げて活動しています。

この２人の卒業生たちは、プロジェクトを実施するためにバランスよく地域の資源と外部からのサポートを活用しています。最終目的は地域の自立です。彼らの素晴らしい点は、コミュニティの人々と、互いに尊重しあえる関係を築き上げ、信頼関係の上に活動を続けていることです。

アジア学院の卒業生であるウェスリーとブチェは 2018 年度の学生の課題や不安を十分理解し、自然な形で彼らとの関係を築くことができました。皆が励まされ、一人の学生が「これで自分の進むべき方向性が見えてきました。ありがとう！」と叫んだ程でした。

2018 年度
に初めて加わった国

エリトリア

二人の学生が農村指導者研修プログラムに参加しました。

女子寮改修工事

東日本大震災の影響でキャンパス内の建物のほとんどが被害を受け、多くは復興事業で再建を果たしましたが、女子寮は強度に問題がないと判断され、補修と一部寝室の改修のみとなっていました。

震災後数年が経ち、特に浴室周りの劣化、また冬の時期の浴室及び洗面エリアの寒さの問題が顕著となってきたため、シャワー室４室にシャワーユニットの設置、その他浴室・洗面エリアの改装、台所の改装、換気扇の整備･設置が行われました。

コイノニアの壁、新しい色に

震災復興事業で新たに建てられたコイノニア（食堂、教室、会議室、厨房）も５年の月日が経ちました。そこで、色あせやカビを防ぐため、外壁塗装をしました。

この建物は敷地の中央に立地していて象徴的な建物でもあるため、色を決めるのは大変でした。チャペルや男子寮と似た色合いで統一感を持たせ、アイボリーをベースとし、チャコールグレーをポイントに入れ、明るく自然なイメージに仕上がりました。

農村指導者を育てる

文

大柳 由紀子
副校長・教務主任

多様性に富んだ学びの機会は
アジア学院のカリキュラムの力

2018年度農村指導者
研修プログラム報告

アジア学院の学生たちは、それぞれ国籍や文化、民族が異なるのみならず、所属する団体の性格も、携わる仕事も、持っている責任も異なります。今年度の最年長の学生は、一番若い学生の人生の長さよりも長い年月にわたって地域で働いてきた経験を持っています。農業にずっと従事してきた人もいれば、ほぼまったく農業経験のなかった人もいます。牧師やシスターもいれば、NGO ワーカーも農民団体から来ている人もいます。先進国で育った日本人学生もいれば、内戦を潜り抜けた経験をもつ学生もいます。

この 25 人はその多様性をものともせず、「違い」をむしろ学びの機会ととらえ、価値観をぶつけ合いながら、252 日を過ごしていきました。様々な葛藤や辛かったこともありました。時にはこんな挑戦的な学習環境から逃げ出したいと感じたこともありました。その中で互いに学びつつ、励ましあいつつ、競いつつ、支えつつ、彼らは 9 か月を共に乗り切っていったのです。最初のうちは「自分は何でも知っている」という態度をとっていた学生も、「自分がいかに何も知らないかを思い知らされた」と語るようになり、年齢の差も経験の差も超えて、互いに学びあう姿勢が確立されていきました。学院の研修は、技術や知識よりもむしろ、このような共同体生活の中で起きる「自己変革」こそが大切なのである、と学院では考えています。

この変革を感じてミャンマー人学生のタッ・パイン・アウンはこう言いました。「自分は「チェンジ」という言葉は好きではなかった。自分は変わっていないと思っていた。でもいま、自分を振り返ると、自分は確かに変わったのだと思う。それが少しずつ、一歩一歩だったから気が付かなかっただけだ。態度も知識も技術も、このアジア学院研修で自分は変えられていったのだ。」

何を学び、何を持ち帰るのか

学院の研修を一言で言い表すことは、大変難しいことです。ページ 26 にあるカリキュラムをご覧いただければ、幅広い本校の授業が明らかになります。指導者論や持続可能な農業、開発論について学ぶ座学の他に、430 時間に及ぶ農業実習、ボカシ肥や発酵飼料など様々な農業技術を学ぶ有機農業実習授業、延べ 1,000 人を超える人々との交流を行った学校や幼稚園への訪問、31 日間・13 都府県・総移動距離 4,600km を超える見学研修も行いました。

200 時間にわたる自習や個人プロジェクトでは、自分一人で畑で練習する者もいれば、食育に興味をもつ者、日本における子供教育について調べた者もいます。毎日のコミュニティ生活、とくに寮生活では、とくに「共に生きる」ことについて学びを深めました。コンサルタントと過ごした時間も、朝の集会で心動かされたことも、60 人の食生活を支えた数トンに及ぶ農産物生産も、すべては学びの基でした。

アジア学院はこのバラエティに富んだ学びの機会を学生たちに提供します。そこから何を必要とするかを取捨選択し、どう適応させていくかを考えていくのは個々の学生なのです。何が地域で必要か、何が手に入り何が手に入らないか、どういう人材がいるのか、それを知っている

のは草の根で働く彼ら自身です。だからこそ、アジア学院は日本から技術者や専門家を派遣するのではなく、地域で働く彼ら自身を学生として招き、学院で様々な経験をつみ、技術的な原則を教えます。結果として学院の研修を数的に測ること、評価することは大変難しいこととなります。それを測り、評価するのは彼らの帰りを待っている各々のコミュニティの人たちなのでしょう。

コミュニティで続く学び

彼らがこれからも前を向いて歩み続けてくれることを、自分のためではなく地域の人々のために学び続けた彼らの夢がいつかかなうことを、そして志を保ち、これからも人々から学びつづけてくれることを私たちアジア学院は信じています。彼らが夢に向かって行動し続けることを、アジア学院はこれからも見守っていきます。タッ・パイン・アウンさんが話した通り、「アジア学院での生活は終わったがアジア学院の学びは終わらない。学びは私のコミュニティで続いていく」のです。

実践を重視した研究科生の学び

2018年度研究科
プログラム報告

アジア学院には、卒業生を対象とした「研究科生」という制度があります。海外の卒業生を対象としたトレーニング・アシスタント（TA）と、日本人卒業生を対象とした卒業生インターン（GI）の二種類のコースがあります。TAは学院を卒業後５年以上自国で働いている卒業生の中から選ばれ、学院において自分の専門分野の研修を行うと同時に、職員を補助して学生の研修を助けます。GIは原則、卒業の次年度に引き続いて研修を行います。特定の一分野に焦点を当てて、その分野のより深い理解と幅広い経験を培います。さらに学院の構成メンバーとして、生活のあらゆる場面において重要な役割を担います。

2018年度は１名のTAと２名のGIがアジア学院で学びを深めるために研修に

参加しました。TA のニランジャラ・マンチャナヤケ（通称ニル）はスリランカの卒業生（2000 年卒）です。食堂で職員を補佐しながら、女子寮の寮監も務めました。ニルは幼稚園の教諭でもあるので、研修テーマとして児童教育をあげ、いくつかの幼稚園や保育園を訪問し、帰国後の働きにつなげました。GI は阿部真紀子と蓮見千明の２名で、元看護士のマキコと大学休学中のチギラは共に「食と農」について学びを深めるべく、農場にて実践的な研修を行いました。中でもチギラは「アニマルウェルフェア」に興味をもち、無去勢豚の飼育に取り組みました。

彼らのように卒業生が身近で学びを深めていくことは、本科生にとっても良い刺激になると考えています。

PARTICIPANT STORY

模範は職員

「クラスメートの中で、あなたのロールモデルは誰？」という質問を、アジア学院では学生たちによく聞く。学院は授業や見学からだけではなく、互いからの学びを重視しており、クラスメートからもリーダーシップを学びあう姿勢を奨励するためである。この質問に対し、今年度の学生たちが最も名前をあげたのが、ジョン・イェボアである。ジョンは南ガーナのアシャンティ州の出身で、長年農民として生計を立てながら地域の女性たちの教育と自立を促ためすなどのコミュニティプロジェクトに関わってきた。そして 2007 年、農民たちが自ら団結して農村を共に改善するために「平和を愛する野菜栽培者協会」という団体を立ち上げ、ジョンは今も同協会の会長を務めている。その彼が、40 代半ばになってなぜ日本まで来て、何を学び、どう成長したのだろうか。

20 年以上農業に携わっているジョンは、研修開始当初は「僕は有機農業技術を学びに来たんだ」と口にはしていたが、大規模農業による収入向上こそが地域にとっての答えである、との思いも持ち続けていた。「自給自足による食料主権」「地域資源の活用」「少量多品目の有機農業」と、それらを支える「サーバントリーダーシップ」に対しては、批判的とまではいかないまでも、疑問を呈することも少なくなかった。地域社会において篤農家として名をはせ、自分はガーナで一番の農民であると自負する彼は、授業においても同じ質問を各講師に繰り返し、「あいつは自分の答えをもっていて、その答えに行きつくまで、質問を繰り返しているんだろう」とクラスメートからみなされていた。

そんなジョンだったが、学院での生活の中で彼は少しずつ変わっていった。人と穏やかに話すこと、年下であっても敬意を払うこと、自分のなすべき役割はしっかりとはたし、なおかつ周りをサポートすること、信頼して仕事を任せること、人の意見に耳を傾けること…。少しずつ、しかし確実にジョンは変化していった。いつしか「I know（知っているよ）」と言わなくなり、むしろ「多くを学んだ」と言うようになっていった。

彼の変化について、担任であるギルバート・ホガングはこう言っている。

「最初、彼は大規模農業や機械化に目を奪われていた。有機農業を地元で始めてはいたものの、疑問を持っていたようだ。それが、いかに地域資源を活用し、地域に適用していくかを考えるようになったのは、我々が学院で行っている実践を見たからではないかと思う。そして、彼が大きく変わったのはリーダーシップにおいてだった。前半は盾をかざして自分を守っていたように私は感じていた。高学歴の人を批判したり、自分がいかに優れた農民であるかを言っていたのは、自信のなさの裏返しだったのだろう。それが徐々に謙虚な態度を身に着けることによって、そういったことを言わなくなり、むしろ言わなくなったからこそ人から賞賛されるようになっていった。なぜ彼が変わったか？彼は職員を見ていた。校長でさえ謙虚で、人々を平等に扱う姿を彼は見ていたんだ。」

ジョンの変化を地域の人々がどう感じ、どうこれから一緒に働いていくのか。彼のこれからの働きが楽しみである。

（大柳 由紀子、副校長・教務主任）

アジア学院のフードライフ

食べものと命の深いつながり

FEAST報告

ザチボル・ラコー・ドゾ
フードライフ課（FEAST）

私は「アジア学院でなぜ食べものがこれほど重要であるか」を理解するのに5年かかりました。2017年に参加したアメリカでのアジア学院報告ツアーの際、スーパーや家庭で食べものが無駄にされている現実に直面し、食べものと正義、安全、健康、環境との深い関係性を理解することがでるようになりました。アジア学院はこの関係性を40年以上強調してきました。私たちの「食からの学び」を学生がより深く理解することができるためにに何か手助けをしたいと思うようになりました。これまで給食（Meal Service）部門であったその名前を、食事を提供するにとどまらないということで、FEAST（Food Education and Sustainable Table 食教育と持続可能な食卓）という名前に変更しました。

この新しい名前は大胆な変更でしたが、結果的には大きな成果につながりました。2018年度の学生は以前と比べて台所での活動にまつわる食の安全と自給をより良く理解してくれ、ジェンダーバランスという意味においても、このリーダーシップ研修に付加価値を与えてくれました。

ミャンマーからの学生、ラー牧師は「リーダーシップの技術を高め、持続可能性の重要さを知る中心的な場所の一つは台所でした」と語り、「自分のコミュニティの人たちを助けたいなら先ずは自分自身の台所で安全な食材を使うことを実践するべきだ」と言ってくれました。地位、宗教、食文化等、背景が異なる人たちが様々な仕事を終えて、コイノニアの食堂に集まり、並んで座って話し合い、笑い合い、同じ器から食べもの分かち合う姿は喜びだけではなく、平和を築く始まりだと信じています。

44,433食

2018年度
コイノニア食堂で
提供した食の数

2017	34,811食
2016	38,142食
2015	41,902食

全キャンパスを巻き込む畜産

畜産部門報告

大谷 崇
フードライフ課（畜産）

ギルバート・ホガング
フードライフ課（畜産）

ヤギ部門では3頭の搾乳を実施し、722リットルのミルクを生産。飼料としての発芽小麦が搾乳量の増加に大きく貢献しました。また自ら飼料を育てる試みとして飼料木としての桑の栽培を始めました。秋にはオスヤギをレンタルで導入し、すべてのメスヤギとの交配を行いました。台風の影響で放牧場の小屋の屋根が吹き飛ぶ被害がありましたが学生とともに修繕、また学生たちの手によりヤギ小屋の部屋の増築も実施しました。鎌などヤギ部門に必要な道具を自ら管理する試みも順調にいきました。

魚部門では70キロの鯉を収穫、水田養魚による雑草管理にも活用されました。

家畜以外では、女子寮の雨水を養魚池に導入する仕組みを構築し、地下水だけに依存しない代替水資源を確保することができました。同時にこれを共有する形で果樹園を養魚池周辺に整備することとし、イチジク、桃、みかんの苗木を定植しました。将来的には果物供給だけではなく、学生のトレーニングにも活用されることが期待されます。また懸案であった雑草対策にナギナタガヤを導入、草マルチとしての活躍が期待されます。

今後はヤギ放牧場での牧草栽培や、子ヤギのための運動場整備、ヤギ乳を用いたチーズなどの乳製品加工のための研究、養魚池周辺の果樹園の拡張などを予定しています。またヤギ小屋は築三十年が経過しようとしており、屋根を中心に老朽化していることから今後の対応を検討しています。

母豚の繁殖

例年よりも母豚が多く、2018年度は107頭の子豚が産まれました。これらの母豚のほとんどはアジア学院で育ちました。繁殖力を確認するために全母豚に人工授精を実施し、分娩（出産）能力をテストしました。繁殖力のある母豚は、初産でも7～12頭の子豚を産むことができます。 最終的に5～6頭の繁殖に用いる母豚を選抜しました。

子豚の出産数は目標を達成しましたが、豚肉の売上は2018年度減少してしまいました。 提携していた肉加工業者でのスライス肉加工が困難となり、販売ができなくなったためで、私たちは豚肉をブロック単位で購入してくれるレストランやハム・ソーセージへの加工業者を探しましたが、全ての部位を販売することはできず、残った豚肉はアジア学院の食卓で消費しました。

飼料の自給率の向上

アジア学院の豚肉が優れた品質を維持できる理由は、飼料だと考えています。家畜の成長の段階に適した有機飼料の配合度合いを研究し、ミキシングルームで混ぜています。この

KEY CONCEPT

フードライフの意味

アジア学院は支援者を含めた学院に関わるすべての人をコミュニティの一員として位置付けています。特にキャンパス内で生活し、学習し、活動をする学生、ボランティア、ワーキングビジター、職員の全員がコミュニティの一員として、野菜作物の栽培や家畜の世話に関わり、その収穫物や生産物を当番で料理をし、食堂（コイノニア）で共にいただきます。

学院創設者の高見敏弘は、現代の人間の生活に見られるように、いのちを大切にしなくなると、食べものも本来の姿を損なわれると言っています。そして、いのちと食べものの関係をフード（食べもの）とライフ（いのち / 生活）という二つの言葉をフードライフという一語にして表し、その生きざまをこの言葉に込めました。少し長いですが、高見敏弘の言葉を引用します。

「食べものは神の賜物である自然と、それを享受していのちを支えることを願う人間との合作によって生み出されるもので、土壌や水や空気中の成分が、緑色植物の根や葉から吸収され、緑色植物と太陽エネルギーの光合成作用によって、タンパク質や炭水化物などに固定され、それが直接食べものになったり、動物に摂取されて肉などとなり、これも人間の食べものとなります。

このように理解すると、わたしたちは、お米の一粒一粒にも宇宙を見ることができるのです。

わたしたちは、学院で、食べものを作れば、作るほど、食べれば、食べるほど、土壌が豊かになり、自然環境がよくなり、人間関係も美しくなる。そのような農法としてフードライフを作り出すことを願って、日々ともに努力を重ねています。このような願いを込めて朝夕、農作業をし、勉強をし、生産された食べものを食卓にのせて、みんで分かち合って食べる時、そこには筆舌に尽くせない喜びがあります。

農場で働くこと、台所で調理して他の人々に食べていただくこともフードライフの大切な一部です。わたしたちが食べる時には、それを作るために汗を流して働いた多くの人々の願いや温かい心も味わうことができる豊かな感性の持ち主となるよう努力をします。堆肥がたくさん入った、柔らかい、良い香りのする土を踏む時、そのために汗を流した先人たちを覚え、彼らの幸いを祈る人間になる。食するごとに、神の恵み、人々の心を味わう―これが、人間が日々守るべき食事です。

フードライフを学院のモットーは短い言葉で表現しています。人のいのちと、それを支える食べものを大切にする世界をつくろう―共に生きるために。」

出典：「土と共に生きる」高見敏弘 , p.63-65

（荒川 治、副校長・農場長）

飼料の配合は学生たちにとって良い学びの機会となります。

2018 年度には、小麦、大豆、トウモロコシ等の穀物を自家生産し、飼料の自給率を高めました。多くの読者の皆様は、アジア学院の畑は主に学生の学びや自給用だと思っていらっしゃるかもしれませんが、実際には一部の収穫物は畜産の飼料の為に使われています。昨年度、野菜・作物部門では小麦の栽培面積を増やしました。その為より多くの自家生産の小麦を家畜用飼料として活用することができました。

また、栄養価の高い「しょうゆかす」を飼料原料として使い始めました。私たちの大豆を醤油に加工する際の副産物で、しょうゆかすには既に大豆かす、塩分、小麦の要素が含まれており、追加する必要がありません。

トウモロコシサイレージも長期間保存できる発酵飼料です。2018 年度には前年度産のものもあり、鶏の飼料用にサイロを一つ詰めました。全てのトウモロコシをサイレージの為に細かくする代わりに、半分以上のトウモロコシを乾燥させ、アジア学院の食堂用とした為、トウモロコシ粉から作るアフリカの主食でもあるフフやケーキを楽しむことができました。

これらのことから、フードライフに関わる全ての部門が、キャンパス全体を活用して有畜複合農業を実践しているかをお伝えできたかと思います。私たちはこの有畜複合農業を改善しながら、人、動物、植物、土壌、環境が更に協力し合い、お互いの能力を引き出していけるようにと努力しているのです。

風土に適した作物づくり

野菜・作物部門報告

櫻井 将伸
フードライフ課(野菜・作物)

一般的な農法と比較して有機農業では生産性の向上は望めないと言われて久しい。農薬なし農法では病害虫の蔓延によって収量が激減する可能性があるし、化学肥料を使用しないということであれば、自分で堆肥や有機肥料を大量に作成、散布する必要が生じ、その手間と労力はかなりのものとなる。また、有機農業では世界の食料をまかなうことは到底できないとの見方をする人も多い。しかし、過去何十年もの間、有機農業の実践による食料の自給を試みてきたアジア学院では、ほとんどの食糧を自分たちで生産し、自給することを達成、周囲の環境を守りつつ、コミュニティを構成する一人ひとりの健康増進に努めてきた。

2018 年における主な穀物や野菜の収量を見ると、全国平均にやや及ばないものの、有機農業での収穫高としては平均以上のレベルにある。今後の作業精度や効率の改善によって、さらなる増収が可能であると考えている。

有機稲作栽培技術に関し、アジア学院では、苗の疎植および田植後の深水管理を基軸とした雑草抑制を徹底してきたことにより、除草の労力を軽減しながら、増収効果をも得ることが可能となった。また、ニンジンやジャガイモ栽培では、毎年、自分たちの手で自家採種した種子や種イモを栽培してきたことにより、アジア学院の畑環境、気候風土に適した品種として選抜されてきたように思う。とくにニンジンでは過去最高の収量を得ることができ、これを用いて 6,279 本の有機ニンジンジュース（1 瓶 300ml ＝ 400 円）が製造できた。これらの他にも、キュウリ、トマト、青ナス、紫ナス、ピーマン、トウガラシ、ニガウリ、バターナッツ、ダイズ、サツマイモ、ハヤトウリ、エゴマ等、自家採種した種子を用い、栽培している野菜が数多くあり、これらもアジア学院の環境に最適化された形質をもつ品種になっているものと思われる。

一般的な農法と比較して有機農業ではとてつもなく多くの手間と労力がかかる。幸いにもアジア学院には、土に学ぶ学生と、その学生の学びを支えるボランティアの方々が大勢いる。ここでは仲間と共に土に取り組み、汗を流し、共に収穫の喜びを分かち合うことができるのである。

2018 年 主な農作物の生産量

米	9,479 kg	(494kg ／ 10a)
小麦	2,995 kg	(190kg ／ 10a)
じゃがいも	1,842 kg	(1,842kg ／ 10a)
さつまいも	733 kg	(1,047kg ／ 10a)
大豆	2,446 kg	(140kg ／ 10a)
黒大豆	115 kg	
にんじん	2,290kg	(1,908kg ／ 10a)
かぼちゃ	69.5 kg	
たまねぎ	849 kg	(849kg ／ 10a)
にんにく	42.7 kg	
エゴマ	19 kg	
キウイ	93.2 kg	
ルバーブ	170 kg	
ブルーベリー	32.8 kg	

加工品

にんじんジュース	6,279 瓶
玄米せんべい	1,200 袋

SPOTLIGHT

最高のものを分かち合う

アジア学院の「学びの共同体」は共同体生活部の職員によって導かれています。

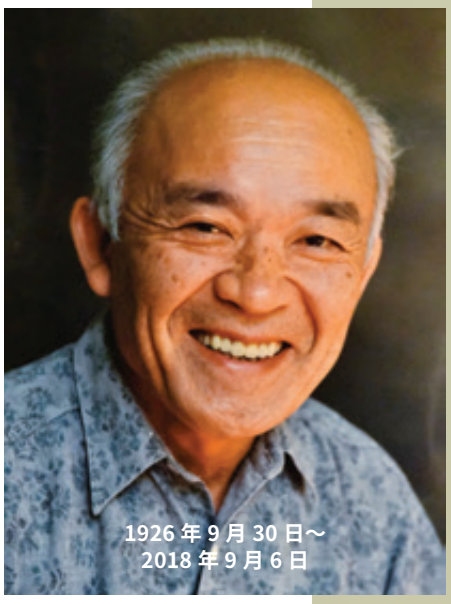
文
教務課・共同体生活

共同体生活（コミュニティライフ）課は、一年間を通じて、ボランティア、学生、職員、訪問者から構成される国際的なコミュニティの健全な成長を見守っています。農村指導者養成は学生が中心ですが、コミュニティ全体の成長をサポートするために、コミュニティイベントを企画したり、新しく来た人たちや体調が悪くなった人、ホームシックになってしまった人のケアをすることもあります。

2018 年度はカルチャーナイトや、アジア学院での滞在期間を終えて帰っていく人のためのお別れ会の開催など、コミュニティのメンバーが自主的に様々なことを企画してくれました。中でもシエラレオネ出身の学生マンブッドが始めたサッカープログラムはストレス解消が出来て一緒に楽しめると、とても人気がありました。

必要に応じて個々人の心のケアもします。長年アジア学院を訪問し協力をしてくださっているアメリカ出身のジョセフ・オザワ先生が、コミュニティメンバー全員との個人カウンセリングの時を持ってくれています。これは 2011 年の災害の年からずっと続いています。

またアジア学院内だけでなく、キャンパスの外にいるアジア学院の支援者やパートナーの皆様も、広い意味でのコミュニティメンバーの一員として「私たちのもてる最高のものを分かち合う」というアジア学院の願いを共有してくださっています。



故髙見敏弘名誉学院長

FAMILY STORY

全ての人に平等に愛を注がれた生涯に感謝して

2018 年 12 月 13 日にコイノニアハウスにて開かれた髙見敏弘先生お別れの会では、卒業生を含む、教会関係者、NGO 関係者など約 260 人が国内外から集まり、先生の交友関係の広さ、親交の深さを思わせた。

特に、先生がいかに全ての人に対して平等に、また友として愛をもって接してこられたか、また先生がいかに多くの友から愛されてきたかが証された会であった。

お別れの会は、第 1 部を潘炯旭（パン ヒョンウック）牧師 (西那須野教会牧師、韓国、1983 年卒) 司式による記念礼拝、第 2 部を荒川朋子校長司会による思い出を語る会の 2 部構成で執り行われました。この時の様子を、当日頂いたメッセージの各一部をご紹介したいと思います。

第 1 部の式辞で学院発足前から髙見先生と交流のあった理事長星野正興牧師は、髙見先生が良く使われた「憶える」という言葉は聖書の中でも大切なモチーフの一つであり、先生はアジアの農民を「憶え」又その人々に関わる自分を「憶え」て欲しい、そして自分もまた貴方を「憶え」ますと言いたかったのだと思う、そしてこの時の「憶え」るは同時に「愛する」或いは「祈る」に通じるものだと説きました。

第 2 部の最初は、日本キリスト教団総幹事の秋山徹牧師でした。先生は 1959 年クアラルンプールで開かれた東アジアキリスト教協議会 (後のアジアキリスト教協議会) の創立総会で、「アジア各国の戦後復興のために農村牧師の養成が急務であり、この任務の遂行を日本の教会に期待する」旨の決議に今日のアジア学院創設の端緒があったと歴史を振り返られました。

学びはつづく

2018 年度のコミュニティの成長を語る時、大きな試練として挙げられるのは人間関係です。メンバー同士の友情関係が時には恋愛関係に変わることがあります。多くの文化では普通で自然なことですが、ある文化ではタブーとして見られることもあります。アジア学院のように多様な文化を内包する場所では、全員が納得できる常識や社会通念というものがなく、ジェンダーや恋愛に関わるギャップを埋めるのも難しい問題です。

もう一つの試練は SNS やインターネットの利用です。故郷の家族や友人と連絡を取る時に個人で SIM カードや無料のメッセンジャーアプリを使います。しかし、ネットや SNS への依存はコミュニティライフから得られる学びに大きく影響します。目の前にいる人と話すよりスマートフォンを好む人たちに、どのようにコミュニティライフの価値を伝えるべきでしょうか。「SNS 断食（SNS を使わない日）」を実施してみましたが、より良い方法がないか模索しています。

アジア学院の「学びのコミュニティ」は日々移り変わり、決まった答えがありません。私たち職員も常に学びの過程の中にいます。様々な課題をどのように受け入れ、建設的な学びの機会にすることができるのか。教室での学びとは違い、学生やボランティアと共に葛藤しながら、私たち共同体生活の職員はサーバントリーダーの良き模範となるように努めています。

1986 年髙見先生とともに、NGO 活動推進センターを設立した伊藤道雄氏は、草の根レベルの分かち合いの活動からこそ活力は生まれると、その後 8 年間初代理事長として、何事も包み込むよう様な先生の姿勢が、多種多様な NGO を幅広く受け入れ、今日の 175 NGO 団体を会員とする国際協力 NGO センター (JANIC) に結実していると偲びました。

髙見先生が 1952 年、ドーン大学 (米国ネブラスカ州) に留学中、親交を深めた同級生 R・ダドリー氏のご子息デイビッド・ダドリー氏も米国から駆けつけ、先生の留学以来の友人からの言葉を紹介しました。曰く「人の生活に不可欠な食べ物を得る方法を教えるというユニークなビジョンを通して、キリスト教の奉仕のあり方を示してくれた人だった」、曰く「他者のために尽くすことの大切さと、それをどう実践するかということを髙見と学院から学んだ。」デイビッド氏はこう結びました。「髙見は、彼の人生と夢を多くの人と共有し、共に一つになる機会を設けました。彼の夢から始まったこのアジア学院の使命は、これからも強く生き続けると信じています。」卒業生を代表してデボラ・シナガ牧師 (インドネシア、1991 年卒) は、先生は異なる宗教、文化、教育水準の者が、命を分かち合いながら調和のうちに共に生きる農村指導者養成プログラムを推進した。自然を命の源とする時、戦争は終わり平和が実現すると訴えました。最後に、アジア学院北米後援会の J・B・フーバー専務理事より、同理事会の、「髙見牧師の功績及び環境に優しい、公平で平和な世界の実現に向けた様々な貢献を認め、そしてご親族の皆様、世界中のアジア学院コミュニティ、職員、卒業生、友人、支援者の皆様にお悔やみを申し上げる」との記念決議が伝えられました。

これらの思い出に応えて、先生のご長男髙見信氏が、家庭人としての父、また自分が同じドーン大学に留学していた時の父親の旧友達との交流、自身の結婚とその後の先生にとっての孫たちの存在など様々な場面での思い出を「アメージング・グレイス、すばらしい恵み」として紹介され、参会者一人一人がそれぞれの「共に生きるために」を見出すことを祈り、又今は皆さんの心の中に生きる父親が、必要な時には必ずアメージング・グレイスとして皆さんをサポートするに違いないと結ばれた後、信子夫人の感謝の言葉を以って閉会した。

講壇前には小さな畑が設けられ卒業生によって野菜の苗が植えられ、その中の先生の遺影は、終始穏やかな眼差しを会場に向け、これらの思い出話を共に静かに聞き入っておられるかのようでした。

（遠藤 抱一、副理事長）

サポーターと共に

山下 崇
募金・国内事業課長
(外部プログラム・
那須セミナーハウス主事)

共に生きるための ヒントを発見する

年間を通して行われるイベントや交流は、アジア学院のコミュニティである支援者、職員、学生などが一緒に学ぶための機会です。

新しい生き方を見つけたい、有機農業の体験をしたい、国際協力活動で役立てたいなど様々な目的をもって、様々な人達が、国内だけでなく海外からもアジア学院にやってきます。

団体で参加するスタディキャンプ、個人で参加するワーキングビジターなどのプログラムは、アジア学院という食料の自給自足を行うコミュニティの中で、“食べものといのちについての独自のアプローチによって、共に分かち合う生き方を学ぶこと”を目的としています。

子ヤギやひよこ、子豚の世話。卵を集めたり、汗を流して雑草をとったり、真っ赤に熟れたトマトを収穫したり。しっかり働いておなかがすいたらごはんの時間。みんなでテーブルを囲む喜びの時間を共有する。そして、この喜びの食卓の背後にある多くの努力といのちの犠牲を感じることがプログラムの真意です。

2018 年度も多くの人が訪れ、アジア学院の経験をシェアしてくれた。ビジターのコメントの中に次のような言葉がありました。

(1) ブルーベリーを収穫する「イングリッシュ・ファーム」参加者
(2) 西日本キャラバン（J-house）
(3) アイリスバーバンクさん
(4)「ランチ in 東京」イベントにてサポーターと交流

「アジア学院で生活したことによって物事を選択する際の自分の中での基準や価値観が変わったと感じる。以前の私の消費活動は経済的な理由に依るところが多く、スーパーに行った時にまとめ買いの方がお得だからという理由で食品を必要以上に購入することがあった。しかし、アジア学院で一つの食べ物を収穫するのにどれだけの人が関わり、どれだけの労働があって収穫されたのかを経験したことにより、生産者側の目線から食に思いを馳せることができ、食に対する愛が芽生えた」

Earth Heart プロジェクト

アメリカのセント・オラフ大学からインターンとして 2017 年の夏にアジア学院に滞在したアイリス・バーバンクさんの、自身の卒業制作に多大なインスピレーションを与えたアジア学院に貢献したいとの思いから、「Earth Heart ～地球と人がアートでつながる」という企画が生まれました。この企画には 8 月中旬から 10 月中旬までの 2 ヶ月間で、アジア学院の近隣の小学校、幼稚園、公民館等計 8 ヶ所で、延べ 300 人が参加し、アイリスさんの指導の元、色の三原色を基礎にした絵画制作を学びながら、アジア学院のメンバーと一緒に「平和」について思いを巡らせ、絵で表現することにチャレンジしました。今までになかったアートという新しい形の交流が、元インターンの活躍によって生まれました。

* 今事業報告書の表紙は、アイリス・バーバンクさんの作品です。

那須セミナーハスに宿泊した団体

（45 団体 616 人）

関東 明治学院大学宗教部、明治大学寺田ゼミ、立教大学 YMCA、東洋大学、文京学院大学甲斐田ゼミ、桜美林大学桃井ゼミ、慶應大学ティースマイヤゼミ、恵泉女学園大学、文教大学林ゼミ、国際基督教大学宗務部、法政大学、聖心女子大学、学生キリスト教友愛会 (SCF) ＆青山女子短期大学＆新島学園短期大学、宇都宮大学重田ゼミ、日本写真芸術専門学校、キリスト教大学高校、佼成学園高校、共愛学園高校、新島学園高校、自由の森学園高校、勝山学園、代田教会、たちこく 9 期 Boys、WE21
関西 同志社大学、木野環境、千里国際高校、関西学院高校、大阪女学院大学
静岡・長野・三重 聖隷クリストファー高校、佐久総合病院、愛農高校
海外 シカゴ地域の合同メソジスト教会、南カリフォルニア合同教会、ボーイスカウト Troop 12
その他 イングリッシュ・ファーム・フォー・ファミリー、イングリッシュ・バイブルキャンプ、ウィメンズ・カンファレンス、ピース・イン・コミュニティ、SCF ＆東北教区、非電化工房、体験入学、ＨＴＣボランティア

使命を達成するための生きた財産

募金によって支えられるアジア学院の最大の財産は、日本だけでなく世界中のパートナーとの豊かな関係です。

短期間でもアジア学院に訪れて下さる訪問者は、コミュニティメンバーに新しい視点と活力をもたらします。一方、訪問者自身は、学生と話し、アジア学院の使命を果たすための作業に参加することで豊かな発見をします。

2018年、私たちはそのような個人および団体の訪問者を多くお迎えしました。そのうちの2人は、6週間私たちと共に過ごして下さったアメリカ人のボブとジョイス・レイ夫妻です。夫妻は1980年からアジア学院に関わって下さっていて、ボブさんはアメリカでAFARI（アジア学院北米後援会）理事を務め、ジョイスさんは英文原稿の校正などに協力してくれています。今年は学生やボランティアとさらに密接な関係を築くために、「収穫感謝の日（HTC）」の時期に合わせて滞在してくれました。

ヨーロッパでの関係強化

国際関係担当職員であるキャシー・フローディは、海外の団体支援者サポートを担当しています。10月に、彼女は主要パートナーとの関係構築・強化のためにヨーロッパへ出張しました。国際関係の取り組みに対してどんな工夫がなされるべきか、彼らの考えに耳を傾けることは、アジア学院の戦略、すなわち私たちの募金活動とボランティアプログラムのあらゆる側面に利益をもたらす新たな洞察を与えてくれました。

この訪問はまたドイツとイギリスの元ボランティアと再会する機会にもなりました。アジア学院でのボランティア体験が彼らの価値感にどれほど深く影響を与えたのかを確信できる多くの証言がありました。

海外団体支援のプロジェクト

アジア学院は生きた団体です。設備やカリキュラムの改善を可能にする寛大なパートナーを通して生き続けています。この1年間に数多くのプロジェクトや奨学金を支援してくれたすべての人や団体、そしてボランティアとその送り出し団体に感謝します。

1986年に、女子寮は多くの支援を受けて建てられました。そして2018年度には再び改修工事のために多くの団体より財政的支援がありました。現在、新しいシャワー室と換気システム、新しい台所ユニットが設置され、女子寮の居住者の生活の質が格段に高まりました。（寄付をくださった団体：カナダ合同教会、米国合同教会、米国福音ルーテル教会、森村豊明会、日本聖公会婦人会）

(1) ドイツのSFD（Social Peace Service）の代表と職員を訪れるキャシー・フローディ国際関係課長（中央）
(2)「収穫感謝の日」に参加するジョイスとボブ・レイさん
(3) 収穫感謝の日
(4) アジア学院産豚肉
(5) アジア学院産農産品

ハワイのパールシティー・コミュニティ教会は雨水集水システムに資金を供給してくださいました。女子寮の屋根の雨どいから雨水を集め、それを養魚池に供給します。これは停電の場合に起こりうる水不足から魚を守ります。

アジア学院は、豚肉を消費者に販売したり、教育プログラムなどの国内事業活動によって、全体収入の20%近くを生み出しています。豚肉プログラムは、カナダ合同教会の助成金を通して購入した保冷車及び食肉加工設備の充実のおかげで大幅に改善されました。

農村コミュニティの力を高めるという使命に対し、アジア学院の最も貴重な資源は、その生きた財産のネットワークです。国際関係課の役割は、これらの財産が、短期間の訪問者、生涯の支援者、地元の日本人、国際的な慈善団体であるかどうかにかかわらず、アジア学院との関係を築き発展させていくことです。皆様の力によって、私たちは使命に向かって働き続けることができるのです。

文
国際関係課

農場の豊かさを支援者と分かち合う

学院収入の約20パーセントは販売品の売り上げから生まれています。2018年度は農産物がその内の6パーセントを占めました。

「食べものといのちについての独自のアプローチによって、我々自身と全世界に問いかけを続けていく。」アジア学院の使命はそう宣言しています。アジア学院は、教育機関であると同時に食料の自給自足を実践する共同体です。このユニークな学び舎は、支援者をはじめ一般の方々にも開かれています。

販売部門では、特に農産物や加工品を購入される方々に対し原料の品質や特徴のみならず、分かち合うこと・食べて頂くことの大切さを伝える役割を担っています。

農産加工品の原料は、学院の人々が日々食卓で供される食材でもあります。自給用と加工用の生産量を計算し作付けを行いますが、同じ圃場、同じ方法で栽培します。豚肉や卵においても家畜の命に感謝し、また世話をする一人ひとりが学びの機会を大事にしながら飼育に携わっています。購入者の方々と直接食卓を共にすることはできなくても、学院で生産された食べ物を分かち合うことは、私たち生産者にとって喜びでもあります。そして一人でも多くの方が農産品を購入し味わうことによって、アジア学院のフードライフを感じ、共に考えることができるよう、販売部門は活動しています。

佐藤 裕美
募金・国内事業課
(販売・庶務・広報)

2018 年度
ベスト売り上げ商品

にんじんジュース
2,300,000 円

nr. 2	お米 1,100,000 円
nr. 3	せんべい 500,000 円

国内支援団体
（10 万円以上の寄付・順不問）

奨学金
東京南ロータリークラブ、日本キリスト教協議会、日本基督教団国際関係委員会、(カ) 聖コロンバン会、(カ) 聖心会 (あけの星修道院)、(一財) アジア農村交流協会、(一財) 新倉会、(一財) 日本福音ルーテル社団、(一社) 東京アメリカンクラブ、(公) 東京聖テモテ教会聖テモテ奉仕奨学金委員会、(公財) 大阪コミュニティ財団、(独) 日本学生支援機構 (JASSO)、(公信) 久保田豊基金

学校
(学) 女子学院、(学) 青山学院中高等部、(学) 関西学院中学部・高等部、(学) 明治学院

諸団体
azbil みつばち倶楽部、学生キリスト教友愛会、帰農志塾、全国友の会中央部、(株) チリウヒーター、東京霞ヶ関ライオンズクラブ、西那須野ロータリークラブ、ワールドファミリー基金、(医社) サマリヤ会、(一財) アジア農村交流協会、(一社) アジア婦人友好会、(一社) わかちあいプロジェクト、(株) 嶌ネットワーク、(公財) あしぎん国際交流財団、(公財) ウェスレー財団、(公財) 全国友の会振興財団、(公財) 森村豊明会、(宗) 立正佼成会那須教会

教会関係
ウェスト東京ユニオンチャーチ、河内キリスト集会、神戸ユニオンチャーチ、国際基督教大学教会、東京ユニオンチャーチ、(カ) 援助修道会、(カ) 大田原教会、(教) 阿佐ヶ谷教会、(教) 西那須野教会、(公) 聖アンデレ教会、(公) 聖オルバン教会、(公) 東京聖三一教会

海外支援団体
（10 万円以上の寄付・順不問）

諸団体
アジア学院北米後援会 (AFARI)

奨学金
アメリカ福音ルーテル教会 (ELCA)、合同メソジスト教会世界宣教（米国）、Bread for the World（ドイツ）、Hartstra Foundation（オランダ）

教会関係
カナダ合同教会、合同メソジスト教会世界宣教、米国合同教会・キリスト教会共同世界宣教、Countryside Community Church（米国）、Pearl City Community Church（米国）、Evangelical Mission in Solidarity（ドイツ）、Missio München（ドイツ）

海外ボランティア派遣団体

Brethren Volunteer Service（米国）、Social Peace Service Kassel, e.V. (SFD)（ドイツ）、United Methodist Church Global Ministry（米国）

インターン派遣団体

国際基督教大学、明治学院大学、Wellesly College（米国）、St. Olaf 大学（米国）

(医社) 医療法人社団、(一財) 一般財団法人、(一社) 一般社団法人、(学) 学校法人、(カ) カトリック、(株) 株式会社、(キ) 日本キリスト教会、(教) 日本基督教団、(公) 日本聖公会、(公財) 公益財団法人、(公社) 公益社団法人、(公信) 公益信託、(財) 財団法人、(社) 社団法人、(宗) 宗教法人、(特活) 特定非営利活動法人、(独) 独立行政法人、(福ル) 日本福音ルーテル教会、(バ連) 日本バプテスト連盟

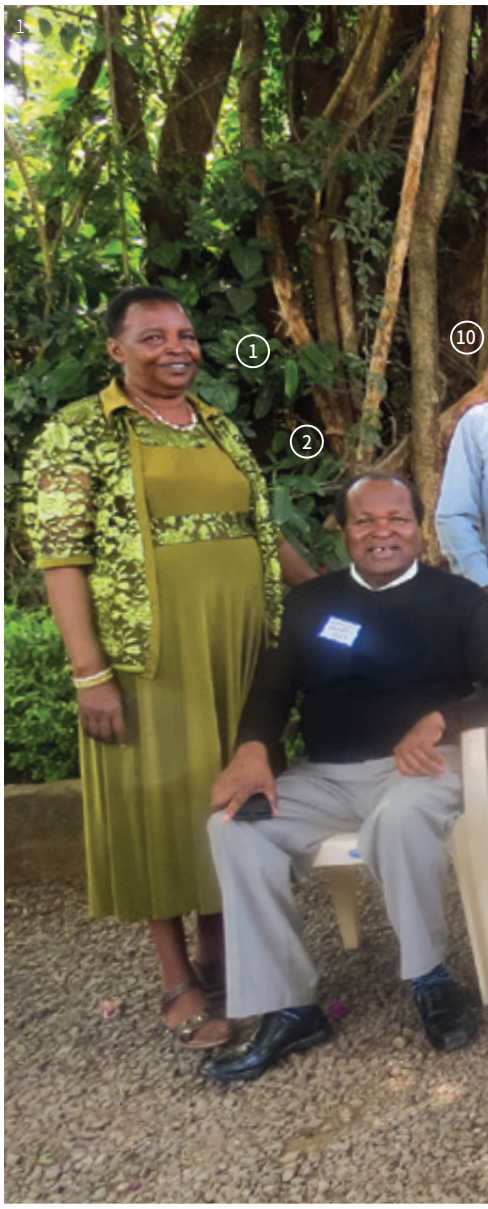
SPOTLIGHT

ケニアの大地を踏んで

(2019年1月11日～22日)

荒川 朋子
校長

初のアフリカ大陸訪問に
学生募集へのヒントが見えた。



この出張はAFARI理事のベヴ・アブマ氏が北米の支援者を対象に企画したものだった。長年に亘ってアフリカ諸国、特にケニアと深い関係を持つアブマ氏が、彼女の人脈を駆使し、過去に４人のスタッフをアジア学院に派遣した（現在は２名の卒業生が所属）ケニア山東部ケニア聖公会（ADSMKE）の活動拠点を４日間かけて訪問し、さらにケニア人卒業生とその所属団体、アジア学院の研修に将来スタッフを送ることに関心を持っている団体などに呼びかけ、アジア学院の紹介、卒業生の近況報告、現在のケニアの抱える問題について話合う２日間のセッションを考案した。私はその企画にアジア学院を代表して参加した。現地ではさらにケニア全土、またアフリカ各地にネットワークをもつ２つの団体訪問も行った。

今回アブマ氏がこの企画を思いついた背景には、ここ数年アジア学院にアフリカからの応募者が急増していること（2018年度は学生の半分、2019年度の応募者の75%がアフリカ人）、その一方で校長を含むアジア学院の職員の中にアフリカでの活動経験者が少ないことが挙げられる。また2014～2015年にかけてアジア学院卒業生の影響度調査を実施したアブマ氏は、調査中に各地の卒業生から「アジア学院が卒業生から学び、卒業生がアジア学院から学ぶという双方向の学びを開拓する必要がある」という指摘を聞き、それに応える具体的なアクションのひとつとして今回の企画が持ち上がったのだった。今回の訪問は私個人がアフリカの地を始めて踏み、アフリカの現状を肌で感じ、文化、気候、社会状況等新しい情報を得、多くのことに気づかされた点で大変意義深いものであったが、ここではアジア学院の今後の学生募集の戦略に関して影響を受けた、送り出し団体との関係構築についてまとめる。

送り出し団体の重要性の再認識

送り出し団体（Sending Bodies）とは、アジア学院の学生の所属団体のことである。アジア学院に応募する個人は、必ず所属団体の推薦を受け、研修後はその団体に戻って学んだことをその中で活かすことが求められている。その意味で送り出し団体は「単に所属している団体」以上に、卒業生の学びを活かすことが期待されている重要な主体である。

今回の訪問ではその送り出し団体の重要性を再認識した。またそれにより学生募集についての考え方が大きく変わった。ADSMKEというアジア学院の卒業生が複数所属し、長年に亘ってアジア学院の研修の内容が団体の活動方針に影響を与え、効果的に活かされている「成功例」をじっくり見ることができたことで、「成功」の鍵を発見することができた。それは、送り出し団体の中核にアジア学院をよく理解するキーパーソンがいるということである。私たちはこれまで、それがどれほど重要であるか十分に理解していなかったように思う。アジア学院の研修にお

(1) 集まりに参加した卒業生と荒川校長（右から2番目）
(2) 首都ナイロビから 200 キロ離れたメル市の風景

セッションに参加した卒業生

1 月 18 日～ 19 日、Missionary Sisters of the Precious Blood Guest House（ナイロビ市内）。1 人はウガンダからの参加。

1982 年	**(1) ジェニファー & (2) ミシェク・カナケ** ARI Day and Boarding School, Tendo Valley Teacher Training College
1990 年	**(3) ムズング・ラファエル・ンゴマ** Institute of Participatory Development（IDP）代表
	(4) ピーター・チャンディ Organic Africa 代表、元 ADSMKE
1994 年	**(5) マドリン・ムトニ・ガトゥム** 元 World Vision Kenya
1996 年	**(6) タビタ・ワンフォキ・ムンイ・ワウェル** ADSMKE
1999 年	**(7) モーゼス・オーチエル** 元 Magoya Cannan Family Development Project
2009 年	**(8) エマニュエル・カリサ・バヤ（ピコロ** Margarini Children Centre and Organic Farming Demonstration Farm（MCCOFDF）代表
2013 年	**(9) ジェスカ・ブチェ・シェヘ**（MCCOFDF）
2015 年	**(10) デービッド・ギタリ・カロキ** ADSMKE
	ジョセフ・ディラング・ギティム Fountain of Life Care Centre
2016 年	**(11) コンソラータ・アミ・カカアリ** Society of the Sacred Heart of Jesus Uganda, Kenya Province
2018 年	**(12) カロライン・ニャマチェ** Lake Victoria Permaculture Initiative Network
	(13) ピーター・ムカサ・バカルバ Church of Uganda – Anglican Communion Mukono Diocese, Mukuno Consultative Development Forum

カナダ合同教会提供

カナダ合同教会提供

カナダ合同教会提供

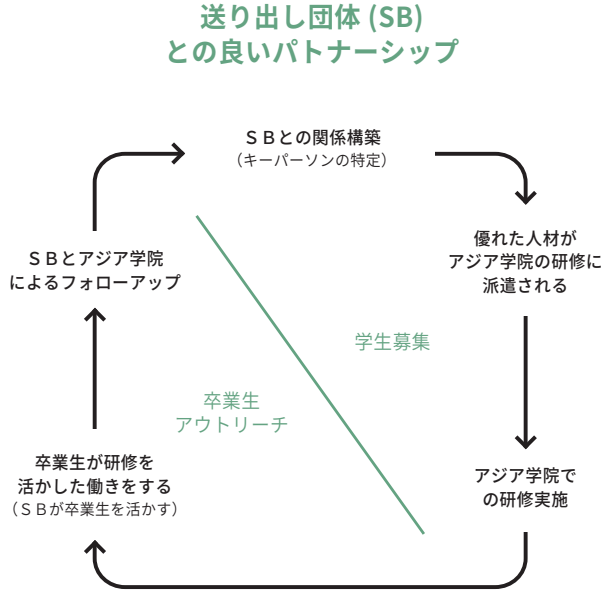
カナダ合同教会提供

(3) AFARI 理事のベヴ・アブマさん
(4) 田舎風景
(5) 卒業生の活動する村での、マイクロクレジットの実演風景
(6) 卒業生が主管する ADSMKE の Macumo 活動センター

いては、どうしても今目の前にいる学生個人個人の技術や資質の変容、発展にフォーカスが置かれ、その背後にある送り出し団体に思いが行き届かないことが多い。しかし、たとえ研修において一人の人間が非常に発展的な形で将来有望なリーダーとして変容を遂げたとしても、帰国後の職場（送り出し団体）においてそれが理解されなければ、効果を発揮する機会を失うことになる。一方で職場においてよい理解があれば、その卒業生は活躍の場を与えられるだけでなく、それが持続的に発展的に用いられるように配慮される可能性は大きくなる。そしてそれは所属団体にとっても、その地域にとっても大きな利益につながる。

ADSMKE の場合、1990 年に最初にアジア学院にスタッフを派遣することを決めたキーパーソン（ADSMKE の当時の専務理事）がアジア学院をよく理解していて、そのスタッフがアジア学院から戻ると彼の学びを組織内で活かすよう配慮し、６年後（1996 年）にはさらに別のスタッフ（女性）の派遣を計画的に行った。そして自分が退職すると、後継者にもアジア学院の情報を正しく伝え、その後継者も同様に２名の優れたスタッフをアジア学院に派遣する（2000 年、2015 年）。そしてその２名の卒業生も帰国後最適の場を与えられ、アジア学院で培ったことを十分に発揮することができ、団体の活動も充実していった。

私たちはこのように、アジア学院の研修の価値、意義を深く理解するキーパーソンを送り出し団体の中核に意識的に探す、あるいは育てていくことが大切だ。このようなキーパーソンを軸に、送り出し団体との間に関係が構築されていけば、あとは良い循環が生まれいき、アジア学院の研修の成果が最大限に発揮される可能性は高くなっていく。



“パートナー”としての送り出し団体との関係構築

アジア学院をよく理解するキーパーソンがいる送り出し団体は、単に学生を送る組織としてだけではなく、共にアジア学院のミッションを達成する“パートナー”ととらえられるべきだ。世界中にアジア学院の“パートナー”団体を認定し、継続的に関係構築を進めていくことで、質の高い学生を得られるだけでなく、長期的にはアジア学院のミッションの達成に貢献できる人材をより多く世に輩出できる可能性が増すと考えられる。

良い送り出し団体を選定するために

ケニアからの帰国後、早速卒業生が複数在籍する団体のリストを作り、“パートナー”団体としてふさわしい団体を洗い出す作業に着手した。この段階において重要だと感じたのは、その団体の発する情報だけでなく、別の情報源からの評価も必要だということだ。例えば、その国や地域で農村開発に関係のある団体とつながっているネットワーク団体や組織に当たってみたり、アジア学院と関係しているキリスト教諸宗派が支援をしている各国の団体リストを参照するなどが考えられる。今回のケニア訪問では、そういった団体に挙げられる World Renew Kenya と Organization of African Instituted Churches の事務所を訪ね、代表者らと活発な情報交換をし、その効果を実感した。

これほど多くの卒業生、また団体の代表者を集めることができたのは、ひとえにベヴ・アブマ氏の長年のケニアとの関係、人脈によるものである。アブマ氏が多くの時間を割いて会議実施のために労を取って下さったことに心から感謝を申し上げたい。さらに、4 日間に亘って地方の ADSMKE の活動センター訪問に同行し、ケニアの現状、長年の農村開発事業の経験の知見を惜しみなく共有して下さった ADSMKE 専務理事のキャサリン・K・ムワンギ氏にも感謝申し上げたい。今回の最大の学びである、「送り出し団体の中核にアジア学院をよく理解するキーパーソンがいる」という気づきは、彼女の存在なしにはあり得なかった。

セッション参加団体

卒業生が送り出し団体の代表をつとめる団体(3団体)

Anglican Development Services of Mt. Kenya East (ADSMKE)
Institute of Participatory Development (IPD)
Margarini Children’s Center and Organic Farming Demonstration Farm

卒業生団体の支援を行う団体（2団体）

World Renew Kenya
St Paul’s University

GRADUATE STORY

ある一人の卒業生の死に際して

今回ケニアにおいて長年農村開発事業に携わる素晴らしい人物に会い、また現場を見て強く再認識したことは、社会に平和をもたらすものとして、食料安全保障、多様性を理解する心（人格・資質）、そして弱者に仕える献身性が非常に重要であるということだ。アジア学院は研修の中でそのすべてを重視しており、このすべてにおいてリーダーシップを発揮できる人材を育成する機関として重要な役割を果たしうると実感した。

実は私たちがケニアに到着するわずか 5 日前に、ADSMKE の職員であり、アジア学院の 2000 年度の卒業生であったジェーン・カブル・ゲトンガさん（享年 50 歳）の葬儀が営まれていた。葬儀には彼女の同僚を初め、彼女が携わった農村開発活動に関連した 1,000 人を超える人が参列したと聞き、とても驚いた。そしてそれを裏付けるように、行く先々で彼女の死を悼む話を聞き、いかに彼女が草の根の人々に寄り添い、大きな影響を与え、将来を期待されて惜しまれた人であったかが分かった。アジア学院の研修が現地でいかに多くの成果を生み、また感謝されているかを、彼女の人生が証していたと感じた。

彼女のように、世界の各地の農村地域で、地道に人々と歩む多くの卒業生の姿を、彼女の人生を振り返る中で想像し、アジア学院の研修が存続されること、卒業生の学びが活かされる環境が整えられることを願わないではいられなかった。

会計報告

皆さまのご支援に心より感謝申し上げます。

貸借対照表

2018 年度は資産が前年度末より約 4.450 万円減少し、約 9 億 8 千万円となりました。これは固定資産の建物の減価償却分及び現金預金、有価証券等の増減によります。一方負債の部は約 2 億 1 千万円で、長期借入金の予定返済等合わせて約 377 万円の負債を減らすことができました。

事業活動収支

学生生徒納付金（予算比 107.6%、前年度比 103.9%）
昨年度より AFARI からの一般奨学金に加え“高見記念奨学金”が加わり、約 100 万円増加しました。また、予定していた奨学金の減額（途中帰国学生分等）があったものの、増額や新規もありました。

寄付金（予算比 91.6%、前年度比 103.2%）
国内寄付は予算比約 500 万円減、前年度比約 250 万円減となり、件数は増えているものの、少額化の傾向があり今後の大きな課題となっています。海外寄付は昨年度減少傾向にありましたが、持ち直しています。特別寄付は約 1 千万円強となり、その内訳は約 630 万円（内海外 413 万円）が女子寮改築指定寄付として、保冷車購入の為の 300 万円、かめのり財団かめのり大賞（アジア・オセアニアの若者の育成に貢献していると評価されての受賞）の 100 万円、個人寄付合計 392 万円でした。

補助活動収入（予算比 102.2%、前年度比 102.3%）
スタディキャンプ参加者が過去最高数に達し、商品販売も野菜作物販売は前年度比 117 万円増と伸び、食堂収入も前年度比約 40 万円増となりました。畜産収入は肉加工業者の途中解約があり、豚肉サポーターの皆様には大変ご迷惑をおかけしました。それに伴い売り上げも前年度比 232 万円減という結果になりましたが、2019 年度新たな業者との契約も決まり、関係構築に力を入れていきます。

総括
2018 年度の予算は、卒業生アウトリーチ部門新設に伴い 440 万円の費用（人件費及びプロジェクト費含）が加わり、また、コンピューターのサーバー・バージョンアップや保守に伴う経費が約 200 万円増となり、収支差額約 1,700 万円を特別寄付に予算化するという大きな課題を抱えてのスタートでした。そのような中で、皆さまのご支援、職員の努力の成果として新たな収入増もあり、減価償却費及び基本金組み入れ前の収支は 24,097 円の支出超過で抑えられたのは幸いなことです。

佐久間 郁・ベロ
事務局長

引き続き厳しい財政状況ではありますが、今後も限られた人的・金銭的資源の中、支出抑制を意識しながら、アジア学院のミッションの実現に向け、また 4 年後の創立 50 周年を見据えながら、財政の安定化に努めていきたいと考えています。

監査報告

学校法人アジア学院寄付行為第 7 条の規定に基づき、2018 年度の事業および会計の状況について監査した結果、適性に執行されたものと認めます。

2019 年 5 月 14 日
学校法人アジア学院

監事：大久保知宏　　監事：村田榮

事業活動収入の部

資産の部	2018 年度末	2017 年度末
固定資産	**930,014,498**	**961,490,670**
有形固定資産	**828,245,780**	**856,976,442**
土地	216,420,666	216,420,666
建物	573,649,888	610,198,648
構築物	15,667,087	16,164,226
教育研究用機器備品	5,192,814	5,961,164
管理用機器備品	1,451,093	1,851,118
図書	6,380,612	6,380,612
車両	1,865,620	8
建設仮勘定	7,618,000	0
特定資産	**96,435,755**	**95,463,135**
第３号基本金引当特定資産	72,951,449	72,875,584
退職給引当特定資産	17,069,501	15,918,650
施設設備維持引当特定資産	6,414,805	6,668,901
その他の固定資産	**5,332,963**	**9,051,093**
電話加入権	161,600	161,600
出資金	154,000	154,000
預託金	76,670	70,800
奨学金特定預金	4,940,693	8,664,693
建物修繕引当特定預金	0	0
流動資産	**50,005,452**	**63,019,846**
現金預金	39,009,285	31,037,501
未収入金	699,191	6,058,085
貯蔵品	1,027,000	566,500
販売用品	4,148,814	2,950,814
有価証券	0	16,895,271
前払金	5,014,373	5,402,373
仮払金	106,789	99,302
立替金	0	10,000
資産の部合計	**980,019,950**	**1,024,510,516**

負債の部		
固定負債	**125,945,665**	**125,633,473**
長期借入金	52,320,000	52,320,000
学校債	32,300,000	32,300,000
退職給与引当金	16,196,530	13,196,530
復興事業修繕引当金	25,129,135	27,816,943
流動負債	**88,139,985**	**92,230,742**
短期借入金	62,000,000	65,460,000
学校債	4,210,000	4,210,000
未払金	1,979,512	3,998,182
未払金消費税	499,200	562,000
前受金	13,886,439	10,164,339
預り金	5,564,834	7,836,221
負債の部合計	**214,085,650**	**217,864,215**

純資産の部		
基本金		
第１号基本金	1,116,354,565	1,115,708,401
第３号基本金	72,951,449	72,799,725
第４号基本金	11,000,000	11,000,000
基本金の部合計	**1,200,306,014**	**1,199,508,126**
事業活動収支差額の部		
翌年度繰越収支差額	-434,371,714	-392,861,825
内今年度事業活動収支差額	-41,509,889	-39,605,633
負債及び純資産の部合計	**980,019,950**	**1,024,510,516**

事業活動収入の部

事業活動収入の部

	2018 年予算	2018 年決算	2019 年予算
教育活動収入			
学生生徒等納付金 [1]	**26,540,028**	**28,556,052**	**38,930,947**
授業料	2,085,600	2,366,120	3,285,600
入学金	449,400	421,000	491,000
食事費	553,700	609,500	843,700
施設設備資金	553,700	609,500	843,700
国内個人学費指定寄付金	0	300,000	0
国内団体学費指定寄付金	12,864,000	10,987,000	13,024,000
海外個人学費指定寄付金	798,028	4,791,175	4,400,000
海外団体学費指定寄付金	8,000,000	7,244,661	11,388,947
渡航費	1,235,600	1,227,096	4,654,000
手数料	**32,000**	**20,000**	**32,000**
寄付金	**72,999,102**	**66,847,098**	**68,189,887**
国内国外一般寄付金	46,660,000	42,613,397	47,590,000
国内	33,940,000	28,824,430	34,850,000
海外	12,720,000	13,788,967	12,740,000
補助金寄付 [2]	9,479,600	10,178,257	9,642,600
特別寄付金 [3]	16,859,502	14,055,444	10,957,287
経常費等補助金	**0**	**348,000**	**0**
付随事業収入 [4]	**28,000,000**	**28,622,017**	**24,043,000**
雑収入	**8,702,000**	**8,415,518**	**8,012,000**
出版物売却収入	200,000	244,300	270,000
施設設備利用料	5,502,000	5,669,750	4,742,000
その他の雑収入	3,000,000	2,501,468	3,000,000
教育活動外収入			
受取利息・配当金	**50,000**	**33,397**	**50,000**
特別収入			
資産売却差額	**0**	**1,494,456**	**0**
事業活動収入合計	**136,323,130**	**134,336,511**	**139,257,834**

事業活動支出の部 [5]

教育活動支出			
人件費	79,129,456	79,194,826	80,449,224
教育研究費	29,086,599	27,779,725	31,466,235
管理経費	67,094,259	66,891,654	67,025,902
（減価償却費）	(40,162,674)	(40,687,904)	(40,912,017)
教育活動外支出			
借入金等利息	1,175,490	1,182,328	1,228,490
差益差損	0	0	0
特別支出			
資産処分差額	0	396,530	0
事業活動支出合計	**176,485,804**	**175,048,539**	**180,169,851**
基本金組入合計	0	-797,888	0
当年度収支差額	-40,162,674	-41,509,889	-40,912,017
前年度繰越収支差額	-392,861,825	-392,861,825	-434,371,714
翌年度繰越収支差額	-433,024,499	-434,371,714	-475,283,731

寄付金の種類別割合

合計 66,847,098 円

事業活動支出の内訳

人件費支出	**79,194,826**
教員人件費	19,622,318
職員 (含嘱託) 人件費	51,849,308
その他人件費	7,723,200
教育研究費	**27,779,725**
消耗品費	296,863
光熱水費	2,752,671
旅費交通費	1,021,996
奨学費	3,856,680
見学費	2,359,042
実験実習費	6,655,659
学生交通費	156,278
学生渡航費	4,377,948
教材費	220,702
研究費	509,982
宿舎費	266,939
学生厚生費	533,088
職員研修費	295,337
事務費	540,000
諸会費	77,900
卒業生同窓会支援費	174,000
プロジェクト費	1,024,892
特別講師費	746,588
車両費（バス・農業用車両）	1,698,661
雑費	214,499
貯蔵品振替差額	0
管理経費	**66,891,654**
消耗品費	185,190
光熱水費	1,179,715
旅費交通費	1,133,933
募金費	3,240,191
車両燃料費	255,500
福利費	431,464
通信運搬費	791,813
事務費	4,972,387
出版物費	747,527
車両修繕費	1,615,329
営繕費	776,931
損害保険料	930,510
賃借料	900,116
公租公課	1,007,350
諸会費	157,850
会議費	350,964
報酬委託手数料	2,120,697
補助活動収入原価	4,986,034
行事費	193,601
渉外費	87,234
雑費	139,414
減価償却費	40,687,904
教育活動外支出	**1,182,328**
借入金等利息	819,328
学校債利息支出	363,000
特別支出	**6**
設備処分差額	6
事業活動支出の部合計	**175,048,539**

注釈

[1] 学生納付金には次のものが含まれる。
入学金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち入学金として指定されたもの
食事費：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち食事費として指定されたもの
施設設備資金：日本人学生納付金および海外学生に対する奨学金のうち寮費・施設設備資金として指定されたもの

[2] 補助金寄付とは、団体からのプロジェクト指定の助成金が含まれる。2017 年度までは経常費等補助金科目の中に仕分けされていましたが、2018 年度より寄付金科目補助金寄付へ勘定科目の修正をした。

[3] 特別寄付は、予算に計上されていない 30 万円以上の寄付（個人・団体）が含まれる。

[4] 農産物、加工食品、民芸品等の販売、プログラム等による収入。

[5] 2018 年度事業活動支出の内訳については、上記を参照。

カリキュラム

研修時間総計：1,973 時間
* 特別講師

指導者論

アジア学院の指導者論	荒川 朋子
サーバント・リーダーシップ	荒川 朋子、大柳 由紀子
アジア学院の歴史と建学の精神	荒川 朋子
参加型農村調査法	荒川 朋子、大柳 由紀子
自律学習	大柳 由紀子
時間管理法	ティモティ・アパウ
プレゼンテーション技術	大柳 由紀子
ファシリテーション技術	大柳 由紀子
ストレス管理法	ジョセフ・オザワ *
宗教と農村生活	ジョナサン・マッカリー、ティモティ・アパウ
報告書作成指導	マイカ・アンダーソン、キャシー・フローディ
共同体モビライゼーションと開発戦略	ハリッシュ・チョータニ *（81 年卒、インド）
21 世紀の環境危機	ナロン・トンスック *（87 年卒、88 年 TA、タイ）
経営管理	プレティシア・トンスック *（87 年卒、95 年 TA、インド）
コーチング	ジェームス・ラティマー *（米国合同教会牧師）

開発論

環境と開発	田坂 興亜*(アジア学院理事)、中島 貴子*(立教大学兼任講師)
栄養概論	ザチボル・ラコー
共助組合論	ギルバート・ホガング
ローカライゼーション	鎌田 陽司 *（NPO 法人「懐かしい未来」代表）
ジェンダー論	荒川 朋子
足尾銅山鉱毒事件と田中正造	坂原 辰男 *（NPO 田中正造大学）
気候変動のもたらす問題	永田 佳之 *（聖心女子大学教授）
開発とアジア学院の使命	J・B・フーバー *（AFARI、iLEAP 代表）
気候変動と国際的パートナーシップ	J・B・フーバー *（AFARI、iLEAP 代表）
那須疎水と西那須野開拓の歴史	大柳 由紀子
友の会の活動について	全国友の会、友の会各支部

持続可能な農業・技術

有機農業	荒川 治
野菜・作物概論	荒川 治
畜産概論	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
作物病害虫管理	荒川 治
畜産病害虫管理	ギルバート・ホガング、大谷 崇、ティモティ・アパウ
代替技術	潘 炯旭
化学農業の危険性	田坂 興亜 *（アジア学院理事）
熱帯における自然農業	村上 真平 *（全国愛農会会長）
アグロフォレストリー	山田 祐彰 *（東京農工大学教授）
生産者と消費者の提携	戸松 礼菜 *（帰農志塾）
バイオガスワークショップ	桑原 衛 *（NPO ふうど代表）
立体農業の哲学	芳賀 欣一 *（戸沢村国際交流協会会長）
農業技術実習	荒川 治、櫻井 将伸
畜産技術実習	ギルバート・ホガング、大谷　崇、ティモティ・アパウ
肉加工実習	大谷 崇、* 小出 秀夫（ノイ・フランク那須）

卒業生セミナー

組織的持続可能性	ウェスリー・リンガ *（93 年卒、99 年 TA、インドネシア）、ブチェ・シェヘ *（13 年卒、ケニア）

日本語、日本文化

小倉 恭子 *

有機農業実習

野菜作物　ぼかし肥作り、堆肥作り、土着菌の採取と活用、天恵緑汁、魚のアミノ酸資材、水溶性カルシウム、炭焼きと木酢作り、籾殻くん炭、自家採種、練り床を利用した苗作り、キノコ栽培
畜産　養豚（人工授精、出産、去勢）、養鶏（育雛、人工ふ化）、養魚、家畜衛生、飼料配合、発酵飼料作り、発酵床式畜舎
肉加工　ソーセージ、ハム

農場管理活動

グループによる農場管理（野菜作物栽培、および畜産管理）
フードライフワーク（自給自足のための農作業および給食準備）
グループリーダーシステム

その他の研修

コミュニティ・ワーク（田植え、稲刈りなど）、内的成長を促す活動（朝の集会、Growth Note、コンサルテーション、リフレクションペーパー、振り返りの日）、口頭発表、収穫感謝の日、国際交流プログラム、見学研修、農村地域研修旅行、西日本研修旅行、ホームステイプログラムなど

研修でお世話になった方々（敬称略、順不同）

農業関連見学・研修先

帰農志塾、金子美登・石川宗郎、田下隆一、桑原衛、民間稲作研究所

夏期個人研修

まんまる農園（丸山尚史）、自由学園農場、関根養魚場、エルム福祉会、チーズ工房那須の森、山のようちえん、マ・メゾン光星、かりいほ

見学先・交流団体

栃木県 那須野ヶ原博物館、足尾銅山鉱毒事件学習（旧松木村跡、足尾製錬所）、渡瀬川遊水池、西那須野幼稚園、槻沢小学校、黒羽中学校、宇都宮北高校、宇都宮女子高校、国際医療福祉大学、西那須野教会、那須塩原教会、家の教会しおん、大田原カトリック教会、那須高原教会、矢板教会、塩谷一粒教会、四條町教会、宇都宮上町教会、鹿沼教会、松原教会、氏家教会、足利教会、足利東教会、小山教会、上三川教会、鹿沼キリスト教会、栃木教会、宇都宮教会
東京都 日本キリスト教団婦人会連合、東京ユニオンチャーチ、日本バプテスト同盟婦人会、中目黒教会
他府県 渡良瀬川鉱毒根絶太田既成同盟会、桐生東部教会、丸木美術館、ARISA (アジア学院サポーター) 各位、各地ロータリークラブ

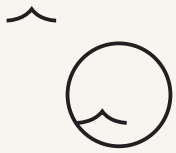
農村地域研修

山形県置賜地区 渡部務・美佐子、菅野芳秀、長井市レインボープラン推進協議会、基督教独立学園、黒沢巌、高畠共生塾（遠藤周次）、高畠町住民生活課エコタウン推進室、米沢郷牧場、ＪＡ山形おきたま農業組合、川西ときめきセミナー（佐藤恵子、原田加矢乃）、川西町役場（原田俊二町長）、しらたかノラの会、米沢興譲教会、草岡ハム加工組合、秋津ミチ子、高畠町地域おこし協力隊、東北おひさま発電株式会社（後藤博信）
山形県庄内地区 加藤鉱一、相馬一広、志藤正一、庄内協同ファーム、月山パイロットファーム、共立社鶴岡生協、ＪＡ庄内たがわ営農農政課、荘内教会（矢沢俊彦）、荘内教会保育園、藤島町農村環境改善センター、庄内産直センター、鶴岡市藤島庁舎エコタウン室、小野寺喜作
秋田県仁賀保町 土田雄一、佐藤喜作、JA にかほ、にかほ市役所、曹洞宗太白院、都市農村交流センター
岩手県 酒匂徹

西日本研修旅行

東京都 農村伝道神学校
静岡県 聖隷学園、聖隷クリストファー中・高等学校、遠州栄光教会、十字の園、アドナイ館、第二アドナイ館、山中忍
大阪府 大阪南 YMCA、NPO 釜ヶ崎支援機構、野宿者ネットワーク（生田武志）、関西沖縄文庫、コリアボランティア協会、関西いのちの電話、希望が丘教会
熊本県 大澤菜穂子、からたち、水俣病歴史考証館、ほっとハウス、坂本しのぶ（証言者）、杉本肇（証言者）
広島県 広島平和記念資料館、岡田恵美子（被爆証言）
三重県 愛農学園高校
岐阜県 永谷嘉規・香、雑草塾

コミュニティメンバー



名誉学院長

高見 敏弘（～9月6日）

役員

理事長

星野　正興	日本基督教団愛川伝道所牧師（7月22日～）

副理事長

遠藤 抱一	アジア学院首都圏事務所事務局長

理事

荒川　朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
後宮　敬爾	日本基督教団霊南坂教会牧師
門脇　英晴	（株）日本総合研究所特別顧問
小海　光	公益財団法人　ウェスレー財団代表理事
佐藤　範明	ホテルサンバレー広報
田坂　興亜	元アジア学院理事長・ アジア農村指導者養成専門学校校長
矢萩　栄司	日本聖公会下館聖公教会牧師
山根　正彦	元（学）香川栄養学園 常務理事

監事

大久保 知宏	藤井産業（株）執行役員 総務部長
村田 榮	那須ワイズメンズクラブ

評議員

荒川 治	アジア農村指導者養成専門学校副校長
荒川 朋子	アジア農村指導者養成専門学校校長
粟谷 しのぶ	弁護士、水野泰孝法律事務所
伊藤 幸史	カトリック新津教会主任司祭
遠藤 抱一	元アジア農村指導者養成専門学校職員
大柳 由紀子	アジア農村指導者養成専門学校副校長
門脇 英晴	（株）日本総合研究所特別顧問
菊地 功	カトリック東京大司教区大司教
小海 光	公益財団法人　ウェスレー財団代表理事
佐久間 郁・ベロ	アジア農村指導者養成専門学校事務局長
清水 たけし	東京ユニオン教会長老
千 相鉉	在日大韓基督教会札幌教会主任牧師
長嶋 清	元アジア農村指導者養成専門学校職員
永田 佳之	聖心女子大学文学部教育学科教授
潘 炯旭	日本基督教団西那須野教会牧師
福本 光夫	（学）西那須野学園　西那須野幼稚園園長
星野 正興	日本基督教団愛川伝道所牧師
山口 和枝	元全国友の会代表
山根 正彦	元（学）香川栄養学園 常務理事
米田 ミチル	聖母訪問会総長
セラジーン・ロシート	NGO/NPO コンサルタント

職員

荒川 朋子	校長
荒川 治	副校長、教育部長、農場長（フードライフ課長）
大柳 由紀子	副校長、教務主任（教務課長）
佐久間ヴェロ 郁・ベロ	事務局長（総務課長）
マイカ・アンダーソン	教務課 (学生募集、卒業生アウトリーチ）（～10月）
コーディ・キーファー	教務課 (学生募集）（8月～）
スティーブン・カッティング	教務課 (卒業生アウトリーチ)
田仲 順子	教務課 (図書)
ティモティ・B・アパウ	チャプレン、教務課 (共同体生活)、 フードライフ課 (畜産)
ジョナサン・マッカーリー	チャプレン、教務課 (共同体生活）
マッカーリー 里美	教務課 (共同体生活)(6月～)
マノシ・チャタジー	教務課 (共同体生活補佐・学生募集補佐）（～8月）
櫻井 将伸	フードライフ課 (野菜・作物)
大谷 崇	フードライフ課 (畜産)
ギルバート・ホガング	フードライフ課 (畜産)
ザチボル・ラコー・ドーゾ	フードライフ課 (給食)、国際関係課
小林 麻奈美	フードライフ課 (給食)
ラビアル・R・J・エスメリオ	フードライフ課 (給食) (3月～)
キャシー・フローディ	国際関係課長
山下 崇	募金・国内事業課長 (外部プログラム・ 那須セミナーハウス主事)
ルイパ・ベロ	募金・国内事業課 (那須セミナーハウス補佐・ 管理人)(6月～)
菊池 あゆみ	募金・国内事業課 (渉外・募金・支援者サポート)
佐藤 裕美	募金・国内事業課 (販売・庶務・広報)
福島 昌代	募金・国内事業課 (食品加工)
八木沢 淳	募金・国内事業課 (募金・広報・教育プログラム)
藤嶋 トーマス 逸生	募金・国内事業課 (広報)
君嶋 満恵	総務課 (会計)
荒井 興柱	総務課 (庶務) (～10月)
安藤 香	総務課 (庶務) (10月～)
井澤 酪	調査

ボランティア

通いボランティア

教務課（学生募集）ジェシカ・キーファー（兼広報）
フードライフ課（農場）相澤 匡、上田 英二、高木 聡史、清水 益男（兼営繕）
フードライフ課（給食）髙村 京子、坂入 貴子、東 千尋、藤本 和子
募金・国内事業課（販売）伊藤 正、猪股 美恵、岩出 貴子、柏谷 重明、堀内 紀江、長岐 幸雄、長岐 とし子、西野 順子、三宅 隆史
総務課　菊池 恭子、佐原 市郎、林田 綾子、高橋 祐子
総務課（営繕）小野崎 仁、伏見 卓、平山 隆

ベクレルセンター（放射能測定室）

阿久津 隆、高嶋 幸雄、早坂 孝行、藤本 渉平、西川 峰城

長期滞在ボランティア

教務課（学生募集）ユリア・シュトラウス、リーケ・ヴェーバ、ヤニス・シュナイダ
教務課（共同体生活）レイ・オリバー・ファブロス（兼卒業生アウトリーチ）、ロベルト・ジュニア・コスタ（兼那須セミナーハウス）
フードライフ課（農場）清水 慶太、マーラ・ヴァイラ、中川 草、クリスティン・ハバード（兼調査）
フードライフ課（給食）村上 龍太郎、デイビッド・ケスラ、ルーカス・ヴァーグナ（兼農場）
国際関係課　ケイトリン・オキン、スティーブン・ミラー、バーバラ・ローズ・フーバー
募金・国内事業課（那須セミナーハウス）原 明里

2018 年度 卒業生

農村開発科

インド	(1) ギャブリエル・ゴンメイ（ロンメイ・バプテスト協会）
	(2) プロケン・パンソ （アムリカルビ・バプテスト協会）
インドネシア	(3) クラウディウス・ブディアント（北中央ジャワキリスト教会）
	(4) ジョー・チャリス・ギンティン（カロ・バタック・プロテスタント教会）
ウガンダ	(5) ピーター・ムカサ・バカルバ（ウガンダ聖公会ムコノ地区）
エリトリア	(6) アディアム・レゼネ・ベルヘ（エリトリア農業省）
	(7) ベルハネ・エティオビア・ハゴス（エリトリア農業省）
ガーナ	(8) エリック・オフォス・アノア（ガーナ・メソジスト教会 ウィネバ地区）
	(9) クゥベナ・フレンポン・フェニング（ガーナ・メソジスト教会 コフォリドゥア地区）
	(10) ジョン・イェボア（平和を愛する野菜栽培者協会）
	(11) ジョセフィーン・アントウィ（草の根社会経済エンパワーメント）
ケニア	(12) カロライン・ニャマチェ（ビクトリア湖パーマカルチャーグループ）
ザンビア	(13) エスター・ミティ（良き羊飼いの修道会）
	(14) プリシラ・ンガンドゥウェ・ンベウェ（良き羊飼いの修道会）
シエラレオネ	(15) マンブ・アルファ・サノ（シエラレオネ 地球の友）
	(16) マンブッ・ケスティン・サマイ（下肢切断者スポーツ協会）
スリランカ	(17) ニラニ・ウェラゴダ（シッダールタ子供開発基金）
	(18) ニサンセラ・マドゥワンティ・ヘッティアラッチ（アジア・ランカ社会開発団体）
日本	(19) 小林 薫
東ティモール	(20) ベニグノ・シモエス・ステバオ （聖心侍女修道会）
フィリピン	(21) コンセプション・ソテロ（ツブライ有機農業実践者協会）
マラウィ	(22) ステラ・エフレイム・ノーティス（「苦しむ者の慰め」聖母マリア修道会）
	(23) ヴェニタ・カドュヤ（マジコ・ラジオステーション）
ミャンマー	(24) ラー・ダー・ウィ（ミャンマー・バプテスト同盟）
	(25) タッ・パイン・アウン（ミャンマー・バプテスト同盟）

研究科

日本	(26) 阿部（武井）真希子
	(27) 蓮見 千明
スリランカ	(28) ニランジャラ・マンチャナヤケ（オキドロ幼稚園）

学校法人 アジア学院

ARI 共に生きるために

address
〒 329-2703
栃木県 那須塩原市 槻沢 442-1

email info@ari-edu.org
tel 0287-36-3111
fax 0287-37-5833

website www.ari-edu.org
Facebook 学校法人 アジア学院
Instagram @asian_rural_institute